

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 古俳諧研究

氏 名 河村瑛子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、江戸時代前期に盛行を見た古俳諧、すなわち、芭蕉以前の貞門・談林の俳諧を研究対象とする。古俳諧は、それまで文献上に記されることの少なかった俗語語彙を豊富に掬い取った言葉の宝庫であり、殊に古俳諧の連句は、語の連想を軸として展開し、その連想語のネットワークが、言葉の持つ微妙なニュアンスやイメージの把握を可能にしている点で資料価値が高い。しかしながら、従来、文学史において低く評価されがちであった古俳諧は、現存する資料の大部分が未翻刻のままにあり、その真価が十分に発揮されない状況にある。そこで、本論文では、古俳諧作品目録の作成、未翻刻作品の読解による全文データの集積、古俳書の書誌調査など、筆者が年来行ってきた古俳諧資料の基盤整備作業にもとづいて、古俳諧研究の方法論を提示し、具体的な事例に即して考察を進めることで、その文学史的意義を捉え直す。

第一部「資料としての古俳諧」では、史上最大の連想語辞書『俳諧類船集』（梅盛編、延宝四年刊）の注釈的研究を中心とした古俳諧研究の方法と意義について論じた。

第一章「『俳諧類船集』注釈上の諸問題」では、まず『類船集』の編者、梅盛について、著述を中心に概観し、謎の多いその人物像に迫った。次に、『類船集』の典拠や引用態度について吟味し、編纂の実態を考察した。本書には、和漢の古典文学作品のみならず、正統的な歌書に収録されない伝承歌や、「童詞」、唱え言のような雑多な記事が多く含まれており、その注釈作業には、諸書を渉猟するのみならず、時には民俗学など隣接諸学の成果をも参照する必要がある。さらに、『類船集』の連想語分析の方法と意義について、「日南北向(ヒナタボツカウ)」「やさし」という二語に着目して論じ、連想語という言葉の周辺部分から語義に迫る本論文の研究方法が、現代も継続して用いられる俗語や、定義の難しい基本語について、根源的な意味合いを解明する糸口となることを示すとともに、上述の研究方法の実践には、古俳諧の実作の参照が不可欠であることを確認した。

第二章「「ものいふ」の本義について」では、言語行為や言語観にとって基礎的な

「ものいふ」という語を取り上げ『類船集』「言(モノイフ)」条の分析と、古俳諧をはじめとする文学作品の用例の検討を通して、従来留意されていない「ものいふ」の語義やニュアンスについて論じた。「ものいふ」とは、基本的に人間以外のものが、相手からの問いかけによらず一方的に発話することをいい、その言葉によって人や状況を変化させ得る、言霊的な靈力を有する語であることを明らかにした。さらに『土佐日記』一月二十一日条の「物言ふやう」な楫取の言葉に、作品を展開する予言的役割があることを指摘し、上述の考察が中世以前にも通底する可能性を示した。

第三章「古俳諧の異国観」では、古俳諧に見える西洋国に関する語彙を分析し、日本人の異国観を明らかにするとともに、俳諧史上重要な「阿蘭陀流」という呼称についても考察した。まず、ポルトガル・スペインを表す「南蛮」「黒船」が、恐怖と憧憬とがない交ぜになった複雑な感覚で捉えられたこと、「いざりす」が「海賊」の同義語であり、海外から来襲する神秘的な脅威とされたことを明らかにした。また、「おらんだ」は、貞門俳諧には攻撃的な姿が詠まれるが、談林俳諧では、好意的な存在へと変化している。この言葉は、談林期において「南蛮」などの古風な言葉に代わり西洋を表す新奇な語として注目されており、「阿蘭陀流」が、貞門・談林それぞれの「おらんだ」観を反映した呼称であることを指摘した。

第二部「古俳諧と芭蕉」では、貞門・談林の俳諧を経験した芭蕉の俳諧と古俳諧との連続性に着目し、古俳諧の研究成果を芭蕉作品の読解へと応用することを試みた。

第四章「芭蕉発句の「背戸」について」では、芭蕉発句「よき家や雀よろこぶ背戸の栗」「琴箱や古物店の背戸の菊」について、「背戸」という語に注目して新たな解釈を提示した。まず、『類船集』「背戸」条の分析から、古俳諧においては、「背戸」が通常は人目に触れない私的な空間であり、「背戸」の植物が亭主の内実の象徴として詠まれることを指摘した。こうした「背戸」のイメージは蕉門俳人にも引き継がれ、殊に挨拶吟で効果的に用いられている。芭蕉発句の「背戸」も、上記の表現史を踏まえたものと考えられ、「背戸の栗」「背戸の菊」は、ともに隠士志向を持つ亭主の心を象徴し、両句が自らと同じ精神性を持つ相手を称美する意図を含むことを明らかにした。

第五章「「かたち」考」では、基本語「かたち」の考察を通して、芭蕉作品の基底にある論理に迫った。まず、『類船集』「像(カタチ)」条の注釈から、「かたち」という語が、実物が存在しないにもかかわらず、それが眼前にあるかのように感じさせるものという意味合いを含むことを指摘した。芭蕉作品の「かたち」にも同様の用法が散見する。殊に『奥の細道』には、「かたち」および類語の「かたみ」を通して往古を幻視するモチーフが繰り返し現れ、平泉条の「形」や、「壺碑」「平泉」両条に見える「千歳の記念」という表現も、往時を眼前に見るためのよすがと解することができるように思われる。以上より、「かたち」という言葉が『奥の細道』の主題や芭

蕉の詩想とかかわる重要語であることを示した。

第六章「擬態語・擬音語の俳諧史」では、元禄七年成立の芭蕉発句「むめがゝにのつと日の出る山路かな」に見える擬態語「のつと」を中心に、古俳諧から元禄俳諧に至る擬態語・擬音語の展開について考察した。まず、芭蕉の独自表現と思われる「のつと」の前提には、一般的な擬態語「によつと」があり、この語が、古俳諧の連句で月の定座を付けるための便利な俳言として頻用されたことを指摘した。古俳諧において、擬態語・擬音語の詠み込みは遣句の一技法とされたが、貞享以後、物付による付け合が廃れ、俳言の必要性が失われたことにより、類型的な擬態語・擬音語の用法は激減し、その役割は変容する。「むめがゝに」句の新しさは、そのような状況にあった「によつと」に再び注目し、語形や用法に独自の変化を加え、詩語として句の中心に据えた点にあると考えられる。また、芭蕉晩年の俳風の特徴である擬態語・擬音語の多用が、古俳諧を経験した芭蕉ならではの手法である可能性にも言及した。

第三部「古俳書の書誌学的研究」では、古俳諧資料の網羅的調査から得た新見に関わる論考を配した。

第七章「貞徳作「壺の名に」独吟百韻の諸本について」では、松永貞徳が「なにがしのかうのとの」への献呈のために著した「壺の名に」独吟百韻（寛永二十年奥）について、諸本の比較検討から、その複雑な改稿過程を明らかにした。本百韻の伝本には、既知の柿衛文庫蔵の自筆本（柿衛本）と、寛文六年刊『俳諧独吟集』（版本）所収の本文のほかに、貞徳自筆の国会図書館蔵『初音はいかい』（国会本）がある。国会本は他の二本と百韻の大部分を異にしており、修辞も整えられていることから、献上用の清書本と推測される。一方、柿衛本は、少なくとも四段階にわたる改稿が施されながらも、最終的には初案に近い形に戻されており、貞徳が、柿衛本を単なる草稿ではなく、別個の作品として認めていたことが知られる。以上の考察を通して、貞徳の俳諧実作の実態や、その俳諧観の一端を明らかにするとともに、寛永期において、俳諧が推敲や献呈に価する文学ジャンルとして既に成熟していたことを示した。なお、国会本については、全文の翻刻と略注を付した。

第八章「上方版『私可多咄』考」では、下里知足の自筆雑記『徳元玄札両吟百韻』（万治二年九月奥）に収録された無題の笑話集（仮題「笑話書留」）を手がかりに、『私可多咄』の失われた初版本について考察した。『私可多咄』の初版の上方版は、近代以降、完本は所在不明で、寛文十二年の江戸版のみが現存し、『骨董集』所引の上方版本文には、江戸版との間に無視できない異同がある。「笑話書留」は、内容が江戸版『私可多咄』と共通するものの、江戸版に比べてト書き的な説明が少なく、その異同の様相が近世前期における上方版嚆本の江戸重版の一般的傾向と合致することから、未知の上方版『私可多咄』の抄出と推定される。上方版『私可多咄』は、書名の通り「仕形咄」を余人に先駆けて意識的に文章化した書であり、江戸版は、当時の

江戸が文化的に未成熟であったために、その試みを理解せずに本文を改変したものであると考えられる。以上より、上方版『私可多咄』は、西鶴の実験的な文体にも通じる文学表現上の先進性を有した可能性がある」と結論した。

第九章「下里知足自筆雑記『徳元玄札両吟百韻』翻刻と解題」では、前章でも触れた『徳元玄札両吟百韻』の内容分析を行い、全文の翻刻と校異、略注を付した。本書には、刊行間もない上方版『私可多咄』や、新刊書を含む書籍目録、「徳元玄札両吟百韻」のような江戸出来の俳諧作品、当時の京都俳壇の状況をうかがい知る俳論書、写本の歌書などが書き留められており、弱冠二十歳の知足が、桑名という地方にありながら、東西双方に目を配って最先端の情報を収集していたことを確認した。本書は、若き日の知足がこの頃すでに卓越した文化感覚を有していたことを物語り、当時の地方貞門俳人の俳諧修練の実態をも示す貴重な資料である。

附録の「古俳諧作品目録」は、元和から天和末年に至る古俳諧作品について、全国の図書館・文庫の目録や江戸時代の書籍目録等にもとづき、散逸書も含めて書目を可能な限り網羅し、筆者の調査による新見を踏まえて、俳書の書誌事項や内容、成立考証などを注記した。本目録は、古俳諧資料の基盤整備の一貫であり、今後、書誌学的見地から新たな俳諧史を構築するための基礎作業である。

以上の考察により、古俳諧資料が、言葉の精緻な意味合いや、その背後にある古人の世界観を明らかにする潜在力を持ち、その研究成果が、俳諧史上・日本文学史上の諸問題の解明に資するのみならず、隣接諸学にも貢献し得る普遍性を備えることを示した。古俳諧は、和漢雅俗にわたる豊穡な世界を内包する稀有な資料群であり、その研究を推進することは、日本文学研究の学術基盤の向上に資する可能性をも含んでいる。